

レオ・チン著『「日本人」になる 植民地台湾とアイデンティティ形成の政治』を読む

簡 宇敏

目次

はじめに

1. 本書の構成
2. 本書の貢献・問題提起

はじめに

本稿では、2001年に出版されたレオ・チン『「日本人」になる 植民地台湾とアイデンティティ形成の政治』(Leo T. S. Ching, *Becoming "Japanese": Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation*)を取り上げる。著者のレオ・チンは、日本文学、日本文化研究、ポストコロニアリズム研究を専門として、カリフォルニア大学サンディエゴ校で日文学の博士号を取得し、現在はデューク大学アジア・アフリカ言語文学部准教授、アジア中東研究所所長を務めている¹。本書のほか、日本の植民地主義的言説に関する論文を *Public Culture* や *South Atlantic Quarterly* 誌に数多く発表し、代表的な論文としては「思考不可能性としての霧社事件——植民地性、原住民性と植民地的差異の認識」²などが挙げられる。なお、2005年3月26-27日に東京外国語大学で開催された国際シンポジウム「台湾原住民研究——日本と台湾における回顧と展望」にコメンテーターとして出席したこともある。

本書は、著者が博士号を取得した論文で、植民地期台湾における被植民者である台湾住民のアイデンティティの形成をテーマとするものであり、2001年にアメリカで出版された。また2006年には、その中国語訳『成為「日本人」 植民地台灣與認同政治』³が台湾で出版された。台湾においては、植民地期の歴史研究やアイデンティティの問題に関しては、1980年代末まで言論の自由が厳しく抑圧されてきたため、研究の蓄積が少なかった。その反動もあり、1990年代における民主化の進展に伴い、植民地期の歴史の発掘がブームになりつつあるなかで、台湾における重層的かつ複雑なアイデンティティの問題は、従来の歴史学方法論の限界やポストコロニアル理論の検証に絶好の素材として注目されている。こうした意味において、本書の中国語訳の台湾での出版は非常に歓迎され、大きな反響が広がっている。本稿では、本書の方法論を検証しつつ、台湾研究における意味と問題点を提示したい。

1. 本書の構成

序章「かつて『日本人』であった人々」では、本書の問題意識が提示されている。すなわち、植民地期台湾において支配的な表現として現れた台湾人アイデンティティがいかに生産されたか、そしてどのように動員されたかの検討を通し、植民地主義的な言説に批判を加えることである。著者は次のような問いを立てている。なぜ日本の植民地主義的言説と実践は、被植民者を日本人化させなければならなかったのか。「日本人」「日本民族」「日本民族性」といった概念は、同化／皇民化のプロセスのなかでいかに生産され、構築され、流通していったのか。「日本人」になる以外に、被植民者にはどのようなアイデンティティ構成と政治的可能性が存在していたのか。そして、ポストコロニアル期における、「かつて日本人であった」被植民者側の日本に対するアンビヴァレントな感情をどう理解すべきか。こうした問いに答えるために、著者は台湾において「重層

¹ 2010年8月現在、レオ・チンはシンガポール国立大学アジア研究所の上席客員研究員として招聘されている。

² レオ・チン「思考不可能性としての霧社事件——植民地性、原住民性と植民地的差異の認識」(長谷川健治訳)、吳密察・黃英哲・垂水千恵編『記憶する台湾 帝国との相見』、東京大学出版会、2005年、103-129頁。

³ 蔣子馨『成為「日本人」 植民地台灣與認同政治』(鄭力軒訳)、麥田出版、2006年。

決定的 (overdetermined) かつ競合的 (competing)」(p. 12) であった被植民者のアイデンティティの形成に秘められたあらゆる可能性を歴史化 (historicize) することを本書の目的としている。

ただしその一方で、著者は「台湾におけるコロニアル・アイデンティティの全体的な歴史像を提示するのではない」(p. 12) として、台湾におけるアイデンティティの問題を中心的に扱うにもかかわらず、エスニック集団内 (intra-ethnic) の分化⁴や先住民民族の異なる部族集団について、論証の対象から除外している。その結果、議論の展開に物足りなさが残ると言わざるを得ない。

第一章「台湾の植民地化——日本植民地主義、脱植民地化、コロニアリズム研究の政治学」では、著者はまず、従来の植民地研究／ポストコロニアリズム研究は西洋中心主義的であったとして、日本が研究対象として重要視されてこず、またそれと同時に、日本植民地主義は特殊事例 (anomaly) として扱われがちであったと指摘した上で、そのような捉え方は、帝国主義国家間の構造的な同一性を隠蔽してしまうことになる主張する。

加えて、著者はさらなる考慮すべき問題を提起している。それは、日本の旧植民地における脱植民地化の問題について、日本の戦後処理が世界冷戦の状況下でいかに棚上げされ続けてきたか、そして、戦後日本の知識人が植民地支配責任の問題に対し、いかに天皇制や戦争責任、主体性といった日本自身の自己批判に留まり、被植民者であった他者との関係の議論を拒絶してきたか、といった問題である。

第二章「絡み合った抵抗——植民地台湾における従属、アイデンティティと政治運動」では、アイデンティティの形成をめぐる 1920 年代以降に台湾で展開された政治運動の意義、また、それが今日に至ってもなおもたらしている影響が論じられている。著者は 1920 年代以降展開された政治運動において、「独自の (半) 自立的な『民族』 (distinctive

and (semi)autonomous “ethnos”」(p. 53) としての「台湾人意識」——「帝国日本」または「漢民族」に從属している——が明瞭に打ち出されていたことから議論を展開する。土着地主資産階級と新興知識人を中心として展開された台湾議會設置運動は、1920 年代後半に、運動の闘争形態に対する志向性の相違から、穏健な改革志向とより急進的な革命志向とに分裂したものの、いずれも台湾人アイデンティティを構築するなかで展開された運動であった。ただし、チンは、従来の研究のように、こうした政治運動の活動内容や路線転換、目標の志向性の類型化を試みるより、むしろポストコロニアル期における「台湾人意識」の解釈に着目する。そこで問題になるのは、植民地期に浮かび上がった「台湾人意識」とは、「中国 (漢民族) 意識」の一部に過ぎなかったのか、あるいは日本植民地主義のもとで自発的に喚起された「台湾意識」なのか、という解釈をめぐる論争であった。

それに対して、著者は、「中国 (漢民族) 意識」と「台湾意識」という区別があくまでもポストコロニアル期の問題意識であると指摘し、「台湾人意識」は植民地期においては中国大陆における民族主義の動向や日本植民地当局の政治的態度、政治活動家の階級的意識といった様々な構造や要因によって可変的な性格を持っており、本質主義的に捉えられる民族意識のみに還元されるものでは決してないと強調する。にもかかわらず、日本植民地統治のもとで現れた台湾と中国との区別は、いまだに台湾の政治的言説の核心に据えられていることから、そこに日本植民地主義的な言説が確かに大きな影響を与え続けていると結論づけられている。

第三章「同化と皇民化のあいだ——植民計画から帝国の臣民へ」では、同化政策と皇民化政策の言説に関する理論的な分析が試みられる。著者は、植民地的なイデオロギーとしての同化を検証し、その可能性の条件を把握することによって、皇民化と戦争動員の特殊な接合を明らかにしようとする。まず、著者は皇民化とは単なる同化の論理的延長 (logical extension) でもなければ、その突然の激化 (abrupt intensification) でもなく、むしろその方法論が根本的に転換したものであると主張する。換言すれば、

⁴ この点について、レオ・チンは台湾人研究者・柯裕棻によるインタビューにおいて、近年台湾における省籍矛盾の問題についてはあまり知悉しないと述べ、この問題を綿密に検討すれば、恐らく全く違う観点から書かねばならないともらしていた。柯裕棻「去殖民與認同政治 訪談《成為日本人》作者荊子馨」、思想編委會編『思想2 歴史與現實』、聯經出版、2006 年。

同化と皇民化とは、論理的には相互依存的であるものの、戦術的には明確な差異がある。従来は、内地延長主義という名目で、台湾人は日本人と同じく日本国民であると標榜されつつも実際には差別待遇を受けており、同化はこうした矛盾を覆い隠すイデオロギーとして作用していた。ところが、皇民化の段階になると、こうした内在する矛盾が根本的に消去され、またそうすることによってしか、植民地的な主体性やアイデンティティの表現／再現の仕方が許容されなくなる。被植民者は「日本人になる」という意識の内面化を、上からの強制ではなく被植民者の責任において遂行し、「日本人にならなければならない」と願う政治的欲望の主体へと転化していったのである。何よりも、「日本人として生きる」ことではなく「日本人として死ぬ」ことこそが、「日本人になる」ことの実践となった。

ここでは、新たな論点が提示されている。著者は皇民化の歴史的意義 (historical significance) について、「植民地期台湾の歴史上はじめて、アイデンティティの葛藤の問題が、被植民者にとって支配的な言説として取り上げられた」(p. 96) と主張する。そして、ポストコロニアル期における、皇民文学に対する「アイデンティティの葛藤」を焦点とした考察や議論に対して、こうした分析が皇民化を説明するどころか、むしろ「皇民化の症候そのもの (symptom of *kominka* itself)」(p. 113) に他ならないと指摘する。

第四章「反乱者から志願兵へ——霧社事件と先住民の野蛮と文明の表象」では、皇民化の問題と植民地期における最大規模の蜂起である霧社事件との関係が分析される。霧社事件を起こした先住民は教育水準が比較的高く、日本統治に対して従順な地域、いわば「理蕃のモデル地区」の出身でもあっただけに、蜂起は植民地当局にとっては青天の霹靂であった。霧社蜂起によって、日本の植民地統治および先住民政策の問題のみならず、「日本の植民地的な近代性そのもの」(p. 151) の根本的な矛盾が暴露された。先住民を「野蛮人」として規定してきた従来の粗雑な政治操作はもはや通じず、その代わり、植民地権力の行使と強化の手段として、「皇民化による文化変容 (acculturation)」(p. 136) が進められたと指摘されるのである。著者は霧社事件をめぐる公式

／非公式のディスコースの検討を通して、霧社事件以後、「野蛮人」から「帝国臣民」へというように先住民表象の転換が目立った形で起きたことは認めつつ、それは実はあくまでも従来の政策の「変容 (transfiguration)」にすぎず、相変わらず「野蛮／文明」の二項対立の図式に制限されていたと主張する。

こうした植民地政府の統治術 (governmentality) の調整は、霧社事件に見られる、もはや抑圧できなくなった矛盾を解消しようとする一方で、厳しくなりつつある時局において先住民に対する戦争動員への「呼びかけのプロセス (process of interpellation)」(p. 152) でもあったとされる。著者は『呉鳳の物語』と『サヨンの鐘』の考察を通じて、かつて「文明／野蛮」の二項対立の図式において、単なる「野蛮」に對置するものとして現れていた「文明」が、霧社蜂起以後には特殊な日本国民性 (Japanese nationality) と結合し、特に天皇に対する忠誠を指すようになったと論じる。先住民は「植民地的慈善 (colonial benevolence)」によって「文明化」されるのを待つのではなく、天皇に忠誠を捧げることによって「日本国体 (Japanese national polity) に同化された帝国の臣民／主体 (imperial subjects)」(p. 137) になったのである。著者は、霧社事件以後における先住民統治策の調整が、日本の植民地支配への執着を示すと同時に、「歴史を作る積極的な主体になる」(p. 152) という先住民の執念をもまた、象徴的に表現していると指摘する。そもそも、日本植民地統治においてヒエラルキーの最下位に置かれた先住民は、植民地主義によって押し付けられてきた孤立的かつ抑圧的な状況を、「日本人になる」という戦略的な自己構築を通してしか一時的に超越しえない。その意味において「日本人になる」という欲望は、単なる「虚偽意識 (false consciousness)」(p. 152) の実現ではなく、霧社事件がもたらしたトラウマ／悲劇を克服しようとする原動力の表現であると分析されるのである。

それに加え、著者は、戦後、先住民に対するインタビューを行なった日本人研究者によるルポルタージュを取り上げ、次のように論じている。これらの作品は先住民の苦悩に対して同情的で、霧社事件を日本の植民地支配への抵抗として捉えているが、霧

社事件の蜂起者と先住民志願兵とを常に結合させてしまっており、これは大きな歴史的皮肉と言わざるをえない。ポストコロニアルな書物の言説分析を通じて、著者は、日本の植民地統治が終結したものの、先住民と日本人との力関係が全く変わっていないということ、そしてかつて「帝国臣民」であったにもかかわらず、先住民が日本人にとって永久に「他者」としてしか認識されていないことを指摘し、その点に批判を加えている。

第五章『濁流のなかへ』——『アジアの孤児』にみる三重意識と植民地の歴史学』では、吳濁流の小説『アジアの孤児』を通し、「植民地台湾・帝国日本・中国」という三角構造に置かれた台湾漢民族のアイデンティティの葛藤が検証される。『アジアの孤児』は、作者・吳濁流が戦時中の1943年に起稿し、1945年に脱稿したものである。初めは『胡志明』の題名⁵で発表されたが、その後は『アジアの孤児』から『歪められた島』へと改題された時期を経て、最終的には『アジアの孤児——日本統治下の台湾』で定着した。主人公の胡太明は幼い頃から私塾で「漢学」を学び、後に日本の近代的学校教育を受けた「新しい文化人」として設定されている。彼は公学校、国語学校を出て教員となり、その後日本へ留学したが、そのいずれにおいても理不尽な待遇を受け続け、植民地支配から逃げようと中国大陆へ渡った。しかし、祖国と思っていた中国においても軽蔑され、スパイ容疑で監禁された。逃走して台湾に戻ったが、今度は軍属として召集され、中国の戦場に駆り出された。様々な矛盾に引き裂かれた結果、胡太明はついに耐えられず、発狂して姿を消してしまった。

『アジアの孤児』に対し、従来の研究の多くは、主人公の「アイデンティティの政治性」に焦点を当てて論じてきた。すなわち、日本植民地支配のもとで、民族的・思想的な源を中国から探るなかで理想の「祖国」と過酷な現実との葛藤によって浮上した「孤児意識」を、「台湾人意識」と見なすべきか、ある

いは「中国民族主義」の一支流として捉えるべきかという問題である。こうした二律背反に対して、著者は第二章ですでに提起した問題を再確認した上で、むしろ「意識の再構築(reconstitution of consciousness)」(p. 176) という方法を通じて植民地的暴力をより批判的な視点で捉え直す必要があると強調する。つまり、『世に存在する』ことを理解する歴史的偶然の過程(a historically contingent process of comprehending one's "being in the world") (p. 232) を通して、日本の植民地的な近代性がいかに被植民者のアイデンティティの形成や変遷に作用していたか、そして、こうした「想像」がいかに「現実」になったか、ということである。

『アジアの孤児』の背景には、太平洋戦争期において、日本が植民地支配を強化することで植民地統治構造の改革が不可能となったとともに、中国や民族主義がもはや台湾解放の解決策ではなくなったという変化がある。著者は、一連の出来事のなかで主人公のアイデンティティの葛藤が生じるときの構造を、「生まれ出ようとしている(coming into being)台湾」(p. 176)の姿と見なしている。ところが、この新しい台湾においては、固定的で完全に構築されたアイデンティティはまだ存在しておらず、それはむしろ「残存する(residual)」中華文化主義と「支配的な(dominant)」日本植民地主義の狭間に浮かび上がっている。著者は第三章で行なった皇民化言説への分析を再び取り上げながら、『アジアの孤児』において表象されるのは複数のアイデンティティに対する主人公の葛藤ではなく、むしろ日本・中国・台湾という三角関係における被植民者の意識形成に現れた「特殊な徴候」、つまり「文化的変容および絶え間ない(不)連続性(cultural mutation and restless (dis)continuity)」(p. 195)であると論じる。

2. 本書の貢献・問題提起

ここまで、本書の構成と内容を簡単に整理し紹介してきたが、最後に本書全体に対する若干の評価を試みたい。

著者は、従来の植民地研究／ポストコロニアリズム研究の問題点を提起した上で、台湾における植民地主義的言説の分析を通して、日本の植民地支配の

⁵ レオ・チンは「1946年の初版は『胡太明』という題名で出版された」(p. 179)としているが、実際には、初版の題名および主人公の名前は「胡志明」で、漢民族が作った王朝「明」を志す意味として付けられていた。ところが、冷戦の始まりで、ベトナム解放運動のリーダーのホー・チ・ミン(胡志明)と間違われよう、作者吳濁流により主人公の名前が胡志明から胡太明に改められた。

アイデンティティ形成への根強い影響を論じている。本書の独創性は、台湾アイデンティティの原点を歴史的偶然に求め、「アイデンティティの葛藤」を日本統治の「遺産」と見なす新たな見解を提示するところにある。そもそも台湾において、台湾意識／台湾アイデンティティの形成は日本の植民地統治の記憶が大きな要因になっているだけに、その解釈にあたって社会的な過剰反応がしばしば起こってしまう。

近年、台湾史研究の分野における台湾アイデンティティの形成に関する議論は、主に「連続説」と「断絶説」という二つの学説に分かれている。前者は、台湾アイデンティティの起源を植民地期における台湾意識に求めるのに対し、後者は当時の台湾意識はあくまで混沌とした従属的なものであり、今日の台湾アイデンティティとは程遠いものであるとして、「アイデンティティ形成の失敗経験」と位置づけている。こうしたアイデンティティの起源が近年執拗に論じられている現象は、台湾が独自の主体性とその正当性を求めようとしていることを示していると思われる。ところが、そもそも「起源」というのは厳格な中立性を保つものではなく、むしろそこに知識や政治、権力が絡んでいる。その意味において、近年台湾において袋小路に入った本質主義的なアイデンティティの議論に対し、レオ・チンがポストコロニアル理論を援用しつつ根本的な批判を加えたことは評価されるべきであろう。

しかし、他面で見逃せない難点もある。一つには、すでに指摘したように、著者がアイデンティティ形成を検証するにあたり、台湾における複雑なエスニック集団の問題を単純化し、概括してしまうことによって、論証が簡略化され過ぎる点である。特に、言語の相違によって生み出されたエスニック集団意識は、日本の植民地支配以前にすでに形成されており、互いに激しく対立していた。そうであるとすれば、こうしたエスニック集団の「想像の共同体」が日本の植民地支配のもとでいかに変容し、いかなる構造的な連続性を保ってきたのか、といった検証も必要ではないだろうか。

さらに、もう一つ指摘しておかなければならないのは、テキスト選択の問題である。著者はアイデン

ティティ形式を「表現／再現するのに最も相応しい」(p. 12) ものとして、検証するテキストや事件を戦略的に選択・排除しているが、その方法論は決して明らかなものとはなっていないように思われる。

例を挙げれば、同化政策と皇民化政策の言説の差異と連続性を検証するにあたり、著者は植民地支配初期における日本人の植民地問題への態度について、新渡戸稲造と竹越与三郎の同化批判、および同化政策の実施に対する矢内原忠雄の解釈を挙げているが、そのためにわずか一頁が割かれているだけで、それ以外の議論は完全に切り捨てられている。むしろ、その時点では、植民地統治の支配の方針は同化ではなかったし、そもそも本書の目的は植民地期全般にわたるあらゆる統治理念の分析ではない。しかし、植民地支配初期の諸政策や諸言説との関係性が検証されないままでは、1920 年以降幅広く受け入れられるようになった同化／皇民化の言説についても理解しづらくなる。それが原因となって、著者が本書の主要な目標としている、同化／皇民化という植民地主義的なイデオロギーの歴史化 (historicize)、またその言説の理論的な分析を通じたアイデンティティ形成への新たな視座の提示は、必ずしも達成されてない。

台湾人意識の解釈をめぐる考察にも問題がある。戦後台湾における「中国中心派」と「台湾中心派」の議論を考察するにあたり、著者は歴史学者の王曉波が 1988 年に提示した論点⁶と、それに対する小説家の宋澤萊の論駁⁷を主に取り上げ、検討している。しかし、戒厳令が敷かれた戦後台湾社会において、台湾住民はいかなるナショナル・アイデンティティを持つべきかという問題をめぐって、はじめて政治のタブーを破って行われた議論が 1983～84 年の「台湾意識論戦」として起こっており、あるいはその前哨戦とも言うべき論争も、戦後台湾の現代文学のあり方をめぐる 1977～78 年の「郷土文学論争」として焦点化していた。当時は厳格な戒厳令が敷かれていたことを考慮すれば、王・宋論争だけに問題を限定してしまったのは、歴史的な文脈を踏まえない恣意

⁶ 王曉波「日據時期『台灣派』の祖國意識」、『台灣史與台灣人』、正中出版、1988 年。

⁷ 宋澤萊『台灣人的自我追尋』、前衛出版、1988 年。

的な選択であると言わざるをえない。

いずれにせよ、本書における独創的な理論展開、数多くの示唆に富んだ指摘は、台湾アイデンティティ問題の検証に役立っている。アイデンティティの葛藤の問題が初めて支配的な言説として取り上げられるようになった「皇民化の意義」が、さらに検証されてゆくことを期待したい。本書において、アイデンティティとは、生来備わっている不変な本質に由来するのではなく、均質的で、一つの核に収斂するようなものではないとはっきり指摘されている。多種多様で可変的なアイデンティティを基礎として、台湾史はさらに自由に論じられるべきであろう。

(ちいえん ゆーみん・東京外国語大学大学院博士後期課程)